

砥川獅子



本番までに行うのは、練習だけではありません。神社の鳥居を飾るしめ縄も担当地域の住民たちが作ります。稲刈りの時期になると、翌年の担当地域が稲わらを集め倉庫に保管。材料調達から取り付けまで全て地域の人たちの手で行われます。

今年のしめ縄作りが行われたのは8月31日。縄に下げる「しめのこ」作りは、保存会の藤島さんが担当。近年移住してきた若い世代の力も借りながら、経験者たちが手際よく縄を編み、約3時間かけて立派なしめ縄が完成しました。

本番当日、会場の設営は早朝から始まります。境内に集まったのは、移住者から重鎮までオールスターと呼べる顔ぶれ。経験者の指示を仰ぎながら、照明の設置、舞台の組み立て、花火の準備と、一つ一つ入念に進められます。

和やかだった空気も、本番が近づくにつれ、その緊張を増していきます。

獅子舞も花火も、やり直しのきかない一発勝負。この日のために準備と練習を重ねてきた4カ月間の思いを乗せて、今年の砥川獅子舞が、いよいよ始まります。

前年の材料調達から始まるしめ縄づくり

本番当日 全てはこの日のために

(左上)当日も朝8時から舞台の組み立てや花火の準備など大忙し
(左)猛暑の中、しめ縄を作った皆さん。立派なしめ縄が完成(上)稲わらも地域で調達。わらの量を調整しながらきつく編む



上段／7月から始まった大人の練習／下段左から／獅子が怖くておじいちゃんから離れられなかった練習初日／親子で毎日猛練習／衣装飾りは保護者の手作り／先輩に習う獅子の動き

祭りの始まりは夏 共に成長する日々

今年の担当地域は全体の3分の2が新しい住民。「継いでいく人ばつくりたか」とい。森田会長の言葉に、例年から3カ月も早い7月からの練習開始という、異例の決断の理由が込められていました。7月12日、下砥川公民館での初顔合わせ。ぎこちない空気の中、笛や太鼓の練習が始まりました。思うように音が出ない笛に戸惑いを隠せない大人たち。その傍らでは、子どもたちの晴れ着となる装身具の作り方を、先輩たちが保護者へ手ほどきしています。9月には獅子回しの練習を

開始。重さ約4kgの獅子を自在に操る手さばき、大地を軽やかに蹴る足さばき。熟練の舞手が体に刻んできたその動きは、一朝一夕で身につくものではありません。

大人たちが練習を重ねる夏が過ぎ、10月には子どもたちが練習に加わります。初めは獅子におびえていた子ども、日を追うごとにその表情が和らいできました。

「ありがとうございます！」「練習の終わり、響く子どもたちの声に、応えるように温かい拍手と健闘をたたえる太鼓の音が続く。祭りの下で、世代も背景も違う人々が、一つになつていく光景が、そこにはありました。

一丸となった 4カ月